

ずいそう

## オリンピック出場・クレ－射撃



中山 由起枝

高校時代はソフトボールのキャッチャーをしていましたが、会社の熱心な勧誘や恩師の薦めもあり、未知の世界である射撃に取り組む事になりました。1997年4月入社後、同僚と2人で1年余に及ぶ射撃留学に旅立ちました。場所は会社の駐在員が住むトリノと聞いていたのですが、イタリア射撃協会指定のコーチは500 km 以上離れたフィレンツェの郊外にいて、会社の間どころか日本人が誰一人もない町で言葉も判らない不自由な生活が始まりました。2人で「帰ろうか」と泣き「やめようか」と悩んだスタートでした。しかし今では良き思い出で、なにより国際大会の場で平常心を保てる土台となりました。

98年秋からは国内中心の活動となり、早速翌年5月開催の熊本ワールドカップの予選会が始まり7人参加のトップで代表となりました。国際大会デビューとなったこの大会で4位タイとなり、シュートオフ（順位決定）で敗れ5位となりました。まだ五輪出場へのルールも知らなかったのですがこのシュートオフで勝っていれば、1～3位の国は獲得済みだったので日本が出場枠を獲得できたと後から聞かされました。クレ－射撃の女子種目は1カ国1人の出場となり、世界選手権やワールドカップなどの優勝国に出場枠が与えられます。1位の国が獲得済みであれば2位に繰り下がって与えられるルールになっています。

その翌月イタリアで開催のワールドカップで3位となり、運も良く繰り下がりルールでシドニー五輪の出場枠を獲得できました。順風満帆で進んできましたが、取材を多数受けるようになり、また周囲の期待や注目を浴びれば浴びるほど自分が孤立するよう感じ、団

体競技とは違う逃げ場のない重圧を感じるようになりました。会社も私も初体験の五輪、周囲も戸惑いながらのオリンピックで17人中13位と惨敗でした。試合後、色々な思いが重なりこの世界から逃げたいという一心で銃を置く決断をしました。

あれだけ嫌だったのに時が経つとまた射台に立ちなくなり、五輪以前からお世話になっている内藤博文コーチも「帰って来い」と熱心に声をかけてくれました。ただ娘が小さく復帰は無理と思っていたのですが、母が「娘がいたからできなかったと、後から後悔するほうが子供に失礼だ」と背中を押してくれ復帰を決心しました。

そして北京五輪へのチャレンジが始まりましたが、06年5月のワールドカップカイロ大会での4位が最高で、なかなか出場枠を獲得できませんでした。そんな中、照準を定めたのが07年4月の韓国でのワールドカップでした。時差もなく、獲るならここだとコンディションを整えて臨み、自身2度目となるワールドカップ優勝で出場枠を獲得できました。

その後、国内決定戦を経て08年4月に北京代表として決定しました。家族に負担をかけ、娘に我慢を強いて掴んだ五輪への切符。これを中途半端にはできない。誰のために頑張るのでもない「自分自身のため」そして娘のため。悔いを残さず本番（8月11日）を迎えたい。今回はクレ－射撃の選手は私一人だったので内藤コーチや会社とも相談し①クレ－を飛ばす機械が北京の会場と同じメーカーで自宅から近い那須国際射撃場を練習の場としたい、②本番ではクレ－上部にパウダーの入った中国製のものを使用するので、これを輸入して練習したい、③試合は6人で撃つので、複数の射手に協力してもらいたい…この願いを叶えてもらいました。周囲の人たちは夫々の分担を全力で取り組んでくれました。メダルにこそ届きませんでしたが、家族、コーチ、射撃の仲間、会社どれか一つでもベクトルが狂っていたら4位入賞はできなかったと確信します。

そして今、娘が「もう1回はやってもいいよ」と許可をくれましたので、皆で更にもう一段階段を上がれるようスタートしています。

—なかやま ゆきえ 日立建機(株) コーポレートコミュニケーション部—



写真—1 15m先のクレ－放出口へ集中